深夜の自画像

五木寛之

深夜の自画像

五木寛之

創樹社

深夜の自画像　0095—0035—4249

1974年4月10日第1刷発行
1974年6月3日第4刷発行

著　　者　**五木寛之**
発 行 者　竹内　達
発 行 所　株式会社　創樹社
　　電話　東京 815・3331(代)　振替東京・154580
　　東京都文京区湯島2・2・1　〒113
本文印刷　福音印刷
製　　本　宮田製本
装　　幀　粟津　潔

1974 © Hiroyuki Itsuki　乱丁・落丁本はお取り替えします。

目

次

旅

根の国紀行＝太宰の津軽と私の津軽——10
長い旅への始まり＝外地引揚者の発想——33
陰のなかの陽・敦賀——42
バルカンの星の下に——51

時代

Ⅰ

わがカタロニア——62
滑稽なる党派——75
再び〈滑稽なる党派〉の立場より——80
喋ることと書くことと——85
二十年目の冬に——90
雪の書庫——94

Ⅱ

現代青春のなかの頽廃——101
われらの歴史——117
ヒトラーの怖れたもの——121
イッツ・ア・ロングウェイ・ツウ・インテリ——130
現代に冒険は可能か——136
辞典と私——141

人間

オカンポの樫の木——150
同時代との出会い＝唐十郎——154
魔女伝説＝緑魔子——159
魔女伝説＝太地喜和子——164
暗い嵐の前夜——172
編集者の青春——179

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

書物

Ⅰ

『死せる魂』からの出発＝ゴーゴリ――188
チェーホフと私――192
オーウェルと私――197
蕭清作家たちの復権――203
朝鮮文化、運命＝安宇植著『金史良』――208

Ⅱ

現代の「反語的精神」＝林達夫――211
啄木と私――218
名著発掘＝平岡正明著『ジャズ宣言』――222
川崎彰彦の〈罪〉と〈跋〉――225
《風景の死滅》のために＝松田政男――230
深淵にひそむものへの予感＝片岡啓治の世界――232

自己

人間へのラブ・コール――238
わが読書遍歴――247
読みものの思想――252
わが日録――256
私の愛するレコード〈ユパンキは歌う〉――265
演劇的近代をどう超えるか――267

小説

大学・血笑記――274

あとがき＝五木寛之――289

●装幀・レイアウト――粟津　潔

●〈写真〉

見返し二点――高梨　豊

五九頁、一八六～一八七頁、二七四頁～二七五頁、二七三頁の計四点――石黒　健治

六〇～六一頁、一四七頁、一四八、一四九、一八五頁の各頁と枝折りの計五点――朝倉　俊博

七、八、九の各頁と二三五、二三六、二三七の各頁の計六点――飯窪　敏彦

＊映像協力――文藝春秋・週刊サンケイ・NOW

深夜の自画像

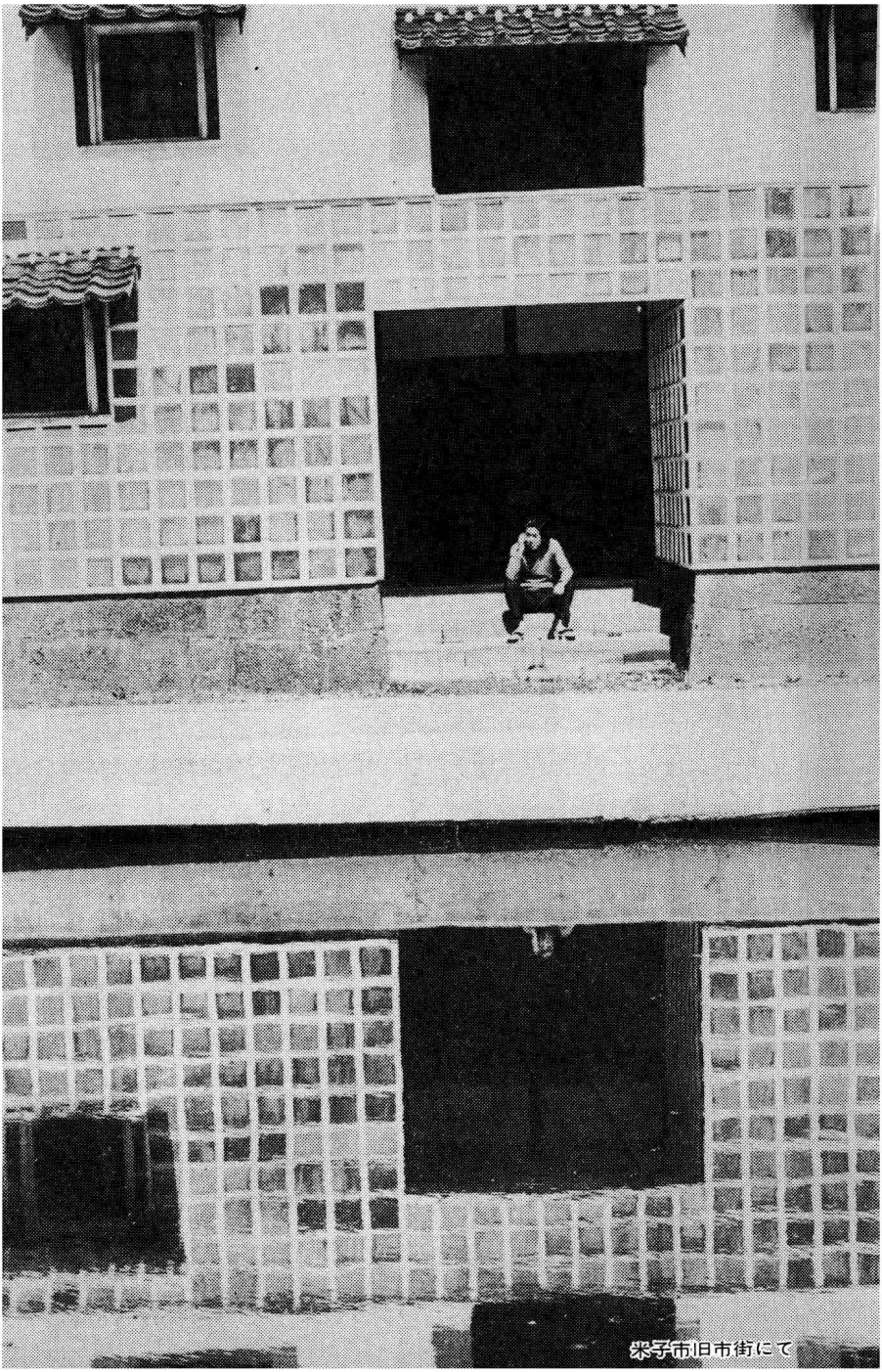
五木寛之

創樹社

旅

鳥取砂丘にて

鳥取県大山山麓にて



栄子市旧市街にて

根の国紀行——太宰の津軽と私の津軽

昭和四四年九月

津軽を訪れるのは何年振りだろう。八年か九年ほど前の夏、私ははじめて津軽の土地を踏んでいる。青森の街でねぶたを見た憶えがあるから、それは恐らく八月初旬の頃だったに違いない。

私にとって、津軽という土地はなぜか自分の内部に或る重みをもって存在し続けている土地だった。妙な話だが、私はこの七、八年の間、いつも津軽の事を大事に思ってきた。九州の筑後の生れで、少年時代を植民地で過した私にとって、津軽は全く縁もゆかりもない他人の国に過ぎない。私はこれまでにたった一度しかその土地を訪れた事はなかったし、それも短い夏の数日をぼんやり送っただけなのだ。

それにもかかわらず、私にとって、津軽という土地は他人の土地ではなかった。津軽、と

か、弘前、とかいった言葉をふと何かのはずみに耳にする度に、私は思わずはっと顔をあげ、無意識に耳をそばだてたものである。

思うに、それはたった一度だけ前に訪れた津軽の印象が、余りにも強く私の内部に彫り込まれてしまっていたせいではなかろうか。より正確にいえば、八、九年前、つまり二十代という奇妙な季節にやがて訣別しようとしていた私自身の、せっぱつまった心の触手が、すがりつくような形で津軽という異質な土地にからみついたため、といえるかも知れない。それに違いないという気がする。

はじめて津軽を訪れた夏、私は二十代の終りにさしかかろうとしている鬱屈した青年だった。いささか色褪せかかった創作への野心と、ますます色濃くなって行く生活上の劣等感を五十キロそこそこの体に隠して、マスコミの底辺で独りぼっちで働いていた。

大学を追われていたため、正規の職場は私の前に閉されており、私は怪しげな業界新聞の編集者として、新宿二丁目の貧弱なオフィスに通っていたのである。

その事務所は、都電の通りに面したピンク色のビルの三階にあった。部屋の窓からは、隣りの〈内外ニュース〉という映画館の裏庭が、すぐ目の下に見えた。それは映画館といっても、ヌード・ショウ実演つきの風変りな劇場で、私は割付けや提灯記事を書く仕事に疲れると、窓からいつもその裏庭を眺めてぼんやり時を過したものだった。

天気のいい空気の涼しい日の午後など、楽屋口の階段に腰をおろして、裸の上にカーディガ

ンやバスタオルを引っかけただけの娘たちが、訛りの強い口調で何事か声高に喋りながらレース編みをしたり、七輪で魚を焼いたりしているのを見おろしていると、私は自分の内部によどんでいる重く暗い肉腫のようなものを、その一瞬だけ忘れる事ができたような気がする。

その頃の私には、やがて近づいてくる三十代を、どのように生きたらよいのか見当がつかず、そのためにひどく虚無的になっていた面があったように思う。三流業界紙の記者兼編集者というものは、つまり傲慢な寄生虫であるか、或は卑屈な恐喝者であるかしなければ勤まるものではない。そして私も慣れ得ぬながらに、それらしき役割りを演じ、その事によって辛うじて生きていたのである。

しかし、そんな生活をいつまでも続けて行くわけにはゆかない、というあせりが、私をとげとげしく、目つきのけわしい人間にしていた。私は記事を書くふりをしながら、よく仕事に関係のない原稿を書いたものだった。それは時には幼年期を過した半島の追憶であったり、また時にはジョイスの翻訳の文章をまねた幼稚な長編小説の断片であったりした。

だが、私は敗戦と引揚げの体験の中から、すこぶる悲観的な物の見方を身につけていたようだ。つまり、私は自分に関して、幸運、という言葉を信じる事ができなかったのである。私は自分を、ひどく運の悪い人間だと信じ込んでいた。たとえ突然に夢のような革命がおこって社会の矛盾が一挙に解消したとしても、自分には恐らく明るい未来などというものはあり得ないに違いない、という気がしていた。

私は経営者兼主筆の目を盗んでは仕事を怠け、取材にかこつけては朝から新宿風月堂の二階にもぐり込んで時間をつぶした。その頃、風月堂は十時から十一時頃までに店に入ると、早朝割引でコーヒーが三十円か四十円位で飲めたのである。そのために開店前の風月堂の前には、いつも数人の若者がぼんやり店の開くのを待って立っていたものだ。

そのころ私は、精神的な倦怠感から本屋で万引きをしたり、即興的な暴力を行使したりするような青年たちを、ひどくうらやましく思ったものだった。私自身はもっと現実的な理由から、何度、紀伊国屋書店で万引きを計画したかも知れない。だが、私は中学生の頃、九州の地方都市で万引きに失敗して、書店の親父さんからひどく屈辱的な取調べを受けた経験があり、その記憶が私の勇気をにぶらせていた。その店主は黒沢明の映画によく出ていた志村喬という俳優氏と酷似していて、その事件以来ながい間、私は彼をスクリーンの中で発見すると、いつも条件反射的な身震いにおそわれたものである。

私がはじめて津軽を訪れたのは、ちょうどそんな時期と重なりあう重苦しい夏の、八月のはじめの頃だった。そして、その夏の短い旅が、それから現在まで、私を津軽という他人の土地に奇妙な形で執着させるきっかけを作ったと言えるのかも知れない。

それはこれという目的もない旅で、私は持っていた蔵書全部を高円寺の古本屋に売り払い、旅に出たのである。

その時も最初の日、青森で列車を降り、知人の家に泊った。ねぶた祭りの笛の音や太鼓の音

が、夜通し遠い海鳴りのようにきこえていた。今の会社をやめようかどうしようか、と私は空かんを叩く単調で哀しげな音を聞きながら考えていた。そのまま業界紙の仕事を続けていれば、自分が駄目になってしまうような予感があった。今ならまだ引き返せる、という気もした。社長やスポンサーの言うままに文章を巧みに曲げたり誇張したりする事で生活を支えるより、デパートの貨物配送の肉体労働のほうが、まだしもましなようにも思われた。社には三日間の休みを届出ていた。もし、それ以上そのまま旅を続けていれば、社では自動的に私を解職するにちがいなかった。だが私は三日でその旅を切りあげるつもりはなかった。ひょっとすると三週間、三月になるかもしれないという気がした。

私は長い間、眠らなかった。通りすぎて行ったねぶたの囃子が、再びもどってくる気配があった。はじめの時と、太鼓のリズムが違っている事に気づいて、私は何となく安心したような気持になり、やがて眠りに落ちて行ったのだった。

その晩の空かんを叩く音は、その後ながく私の記憶の底にこびりついて離れなかった。翌日の夜、雨の中をゆらゆらと揺れながら動いてきた巨大な武者人形のイメージとともに、それは私の中の青森の印象の欠かせないモザイクの一片となって残ったように思う。

人は偏見を得るために旅行する、と言ったアメリカの文学者がいた。私もそう思う。はじめ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo